1 どの子にも 涼しく 風の吹く日かな (飯田龍太)

33日間の夏休みがあつという間に終わり、吹く風もずいぶん涼しく感じるようになりました。みなさんの夏休みはどんな夏休みでしたか。度重なるコロナ感染急拡大の中、楽しみにしていた家族や友達との大切な時間も思い描いた通りにはならなかったかもしれません。でも、それぞれに工夫しながら、長い夏休みを楽しめるものにできたのではないかと思います。

2 夏休みの振り返り

ところで、1学期の終業の日。皆さんに1つのお願いをしました。

それは、自分の命。人の命。沢山の命。「命」を大切にしてください。ということでした。この夏休み、交通事故や水難事故の報告はありませんでした。それは、皆さん一人一人が、先生方のお話をしっかりと受け止め、「命」のことを真剣に考えてくれたその成果だろうと、うれしく思います。

3 8月の記憶 ～ 登校日に代えて ～

さて、夏は毎年やってきますが、今から77年前の夏のことをお話しします。

その年の夏は、日本の歴史上最も悲しい夏となりました。8月の6日から15日の間。たった10日ほどの間に、信じられないくらい沢山の命が失われたからです。8月6日には広島に原子爆弾が投下され約14万人の方々が亡くなりました。同じく、8月9日には長崎に原子爆弾が投下され約7万4千人の方々が亡くなりました。そして、8月15日、4年間続いた太平洋戦争が、日本の敗戦という形で幕を閉じました。

77年前の夏、そんな悲惨な戦争がこの日本にもあったという事実を忘れてはならないと思っています。過去の記憶を未来に繋ぐことが、現在を生きる私たちの責務だと思うからです。

あるニュース番組の中で紹介された、長崎県出身の女性の言葉を紹介します。

東京に出てきて一番ショックだったのは、8月9日、午前11時2分。77年前に原爆の投下されたその日、その時間。東京では誰も足を止める人がいないことでした。そして長崎の原爆で亡くなった多くの人々を追悼するサイレンが鳴らないことでした。長崎では、幼い頃から、その時間にはサイレンが鳴り、戦没者の方々に黙祷を捧げるのが当たり前のことでした。その時間には車もその場に止まり、目を瞑って死者を弔います。ところが、東京ではそんな姿はどこにもありませんでした。私は強い衝撃を受けました。

1学期には、延岡大空襲の学習や黙祷を行いました。また、今現在、ロシアとウクライナの戦争が世界の平和に暗い影を落としてもいます。これらのことを遠い昔の出来事、遠い異国の出来事としてではなく、自分たちの未来につながる大切な記憶として、心に刻んでほしいと思っています。

4 おわりに

いよいよ1年間で一番長い2学期がスタートしました。予定では77日間。

中学2年生は長崎で、小学6年生は大分宇佐市で、修学旅行の平和学習を予定しています。その他の学年でも、宿泊体験学習やまち探検など様々な体験活動が準備されています。また、中学3年生は、これから後のすべての行事の頭に「最後の」という接頭語がつき、中学校生活の締めくくりを行っていきます。各学年、それぞれテーマは違っても、楽しむことと学ぶこと、その両方を大切にしながら、1学期以上に勢いのある学校生活を送ってほしいと願っています。